

5C⑬キングダムセミナー20260110

2026年の1月のキングダムセミナーを始めていきましょう。

こちらの教室の皆さんも LINE の皆さんも準備はいいですか？では、信仰の歌を歌っていきましょう。

賛美：2番主は勝利をおさめ 8番全地よ、神に向かい喜び叫べ 10番天を造り出し

前半:10:48.39

今日のところは、パート3【『神の国』と『再臨の教え』】に入るところまでできています。いつも深く思うんですけど、このパート3あたりにいくまでに、パート1の【主との一致】それから、パート2の【もうひとりの私との出会い】というところが本当に飲み込めて、そして自分でそのように生きられるという落ち着きが出てきたところで、それを押さえて一つ一つ次に深めていきたいところなんです。はい、ですから、パート1、パート2のところで、みなさん、どうでしたか？・・・私、本当は、皆さんお一人お一人と、ゆっくり対話をしたいところなんですけれどね。どうでしょう。パート1、パート2まで一応終わったということで、・・・これまあ、これからもずっと思いを深めていくことは続くんですけどね。今、何かみなさんの中から感想なりコメントなりがもしありましたら、どうぞ。大丈夫ですか？「そんなべらべらと何か感想を述べられるということではない」と、いう感じでしょうか・・・はい、では、今日のところに入っていきますね。13:33.35

でも、この本の内容を全部細かく読むということではなくて、今回は、ちょっと違う角度から言いたいこと、話したいこと、分かち合いたいところがいろいろあるんですけど、主題は変わりません。「じゃあ、『神の国』ってなんですか？」ということなんです。まず、68ページを見てください。読みますよ。14:22.54

前回から1か月間（←当時のことです）、《主との相互内在》といった関係を当たり前に行っている聖書の《霊的原理》を私たちは黙想しました。《集合人格》として言い表している現実にあなたは思いを留めることができたでしょうか。突然に聞かされて、やはり馴染みにくい概念であったかもしれません。聖書の中の実例を出されると「なるほど！」と思えても、自分の生活や心には「どうも捉えがたい」といったところでしょうか。それどころか、「どうしてそんなに大事なことなのだろうか？」と疑問にさえ感じておられるでしょうか。確かに今のところ、そういった感が拭い切れないかも知れません。まだまだ、この点についての黙想をし始めたところだからです。

しかし、私にはこの概念に対する距離が御国と私たちとの距離ではないかとさえ思えるんです。父と子と御霊の集合人格を思う時、あるいは、主と私たち、私たち信者どうしの集合人格を思うとき、神の国を知る基本的センスが、まさにここにあるのです。

さて、いよいよ主題に入ろうと思うのですが、これまでセミナーを聞いてこられたあなたは、「この集会で言う『神の国』とは一体何を指しているのだろうか？」と思ってこられたかもしれません。というのは、これまで『神の国』というものが、人によって色々なイメージで受け止められてきたからです。これまでいろいろな受け

5C⑬キングダムセミナー20260110

止め方をされていても、そもそも人々の歩み自体には、大した影響もない主題、それが『神の国』だった。とも言えるでしょう。神の国を話題にするよりも、聖霊とか個人預言、癒し、天使、伝道、教勢拡大、患難、再臨などのテーマの方が重要なものに思える時代に私たちはいました。それだけ、ここ日本においても『神の国』が遠かったと言えそうです。けれども、部分を見て全体の成り立ちを見ない時代は、もう過ぎようとしています。『神の国』と言う本質的包括的な啓示があるかないかが、大きく問われる時代に、私たちは入っているのです。

そこで、『神の国とは何か』と言う話に入る前に、いかに聖書が『神の国』を中心に語っているのか、《その重要性のについて》もう少し話させてください。今日の集会の目的は、もちろん《神の国とは何か》です。しかしながら、《神の国という概念》に対しての様々なつまづきを整理することに、まず時間を費やしてみたいと思います。もしそうしないで、いきなり「神の国とは、こういうものですよ」と聞いて理解したとしても、今までのように、どうしても良い御国についての概念の箱が、あなたの頭の中で一つ増えるだけになってしまうことでしょう。

聖書の主題は何かと聞かれれば、「福音だ！」と誰もが答えるでしょう。「全世界に出て行き、すべての造られたものに『福音』を宣べ伝えなさい」と命じられている通りです。しかし、ご存知のように福音とは『よき知らせ』を意味しているだけです。単に「福音」を宣べ伝える」というだけでは、これは意味をなしません。「何についての良い知らせなのか」が明確でなければなりません。イエスが私たちに告げている『良き知らせ』とは『神の国』についての喜ばしく、そして踊り出したくなる知らせなのです。新約聖書を読んでいきますと、イエスの来られた大目的が、『神の国の宣教だった』ことが解ります。それをいくつかの聖書箇所でも確認しておきましょう。19:47.71

それで、ここに聖書の言葉を挙げています。ちょっと、読んでみましょう。

「この時から、イエスは宣教を開始して、言われた。『悔い改めなさい。天の御国が近づいたから』」【マタイ 4:17】

「イエスはガリラヤ全土を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民のなかのあらゆる病気、あらゆるわずらいを直された」【マタイ 4:23】

「この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます」【マタイ 24:14】

「しかし、イエスは彼らにこう言われた。『他の町々にも、どうしても神の国の福音を宣べ伝えなければなりません。わたしはそのために遣わされたのですから』」【ルカ 4:43】

「その後、イエスは、神の国を説き、その福音を宣べ伝えながら、町や村を次から次に旅をしておられた」【ルカ 8:1】

「イエスは苦しみを受けた後、40 日間の間、彼らに現れて、神の国のことを語り、数多くの確かな証拠をもって

5C⑬キングダムセミナー20260110

ご自分が生きておられることを使徒たちに示された。】(使徒 1:3)

さあ、このように、イエスが語ったのは『神の国の福音』であったことは明確です。イエスが来て語られた大テーマが『神の国』ならば、それを聞いていた人々には、それを耳にする素地があったと見ることができます。ということは、まさに『神の国』は、旧・新約を一貫しての大テーマだったということです。21:58.48

この私自身は、かつて福音と聞けば、『イエス・キリストの福音』としか頭に浮びませんでした。・・・やはり、そんな時がありました。・・・結構そういう人が多いようです。一般的に『神の国の福音』も『キリストの福音』も同じものだと考えられてきたからです。そして勿論のこと、初代使徒たちもイエス・キリストについて語ることがすべてであったと受け取られてきたのです。しかし、規制概念で聖書を読んでもなかなか開けてくるものではありません。渇きをもって何度も読み直すとき、少しずつ見えてくるのです。では、次に、またいくつかの箇所を読んでみましょう。22:56.42

イエス後の初代使徒たちは、本当のところ、何を語り、何を教えたのでしょうか。彼らはしっかりと 2つの分野を教えています。

【ピリポが『神の国』と『イエスキリストの御名』について宣べるのを信じた彼らは、男も女もバプテスマを受けた】(使徒 8:12)

【パウロは会道に入って、三ヶ月の間大胆に語り、神の国(の事柄)について論じて、彼らを説得しようと努めた】(使徒 19:8)

【そこで彼らは日を定めて、さらに大勢でパウロの宿にやって来た。彼は朝から晩まで語り続けた。神の国のことを証しし、またモーセの律法と預言者たちの書によって、イエスのことについて彼らを説得しようとした】(使徒 28:23)

【パウロは、・・・大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた】(使徒 28:30.31)

0:24:20.21

もし『イエス・キリストのこと』が即ち『神の国の福音』であるなら、どうしてこうも二つが並べられているのでしょうか。彼らはもちろん、現在の私たちと同様、イエス・キリストについて語ることで十分ではないでしょうか。『イエス・キリストの事柄の中にすべてが含まれている』と、私たちは思ってきたのではないのでしょうか。

しかし、彼らは『イエス・キリストのこと』とともに、あるいは先立って、『神の国』についても話したのです。「パウロは、『神の国』を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた・・・」と私たちが読むとき、後者の「主

5C⑬キングダムセミナー20260110

イエス・キリストのこと」についての内容は、私たちにも想像に難しくありません。しかし、前者の『神の国』に関しては、「彼らがいったい何を話したのだろうか」と思ってしまう。このように主、「主イエス・キリストのほかに、何を話すことがあったのだろうか？」と思ってしまうほど、私たちが御国の現実から、私たちの認識が離れてしまっていることが問題なのです。そういうことです。・・・じゃあ、私達は御国にいないのかと、・・・そういうことを言っているのではないですよ。御国にいるんだけど、御国というものの認識が薄かったと、いえますよね。もうちょっと、読みましょう。26026.36

現在、私たちは初代教会をしのぐかもしれないほどの聖霊の臨在を迎えています。しかしそれは、『神の国』という福音に支えられた初代教会の聖霊の現れをしのいではないのです。初代教会は、『御国の福音』を基礎として『キリストの福音』を受け取りました。けれども、私たちはその基礎なしに、『キリストの福音』を受け取っているようです。聖霊、賜物、勤め、職務、ワーシップ、賛美礼拝、預言、癒し、奇跡、伝道、そして各地のリバイバル等々と、素晴らしい恵みを受け取りながら、これらはすべてを麗しく保つ入れ物を持っていなかったのです。多くの真理が回復された後、決定的な啓示が現在解き放たれています。今、この御国の回復がやって来ているのです。・・・『神の国』ってなんですか？という質問が自分の中で、渇きがムクムクと湧き上がってきたら、ベリーグッドですよ。28:53.43

【『神の国の福音』と『キリストの福音』】73 ページの中ほどに、下線を引いている部分があります。ここをちょっと読ましてください。

・・・ここ、本当は、上に挙げてある聖句を全部読んでから、ここを読むべきなんですけど、後で読んで頂き、今は、ちょっと飛ばして読みますね。

このように、『キリストの福音』と『神の国の福音』は同一のものではありません。また競合するものでもありません。『神の国』を完成するための必要条件が『キリストの福音』だったのです。『神の国の福音』がなければ『キリストの福音』は、その究極の目的を失い『キリストの福音』がなければ、『神の国』は決して完成しないのです。この両者の関わりについて聖書からの理解があれば、『神の国』を黙想することに抵抗感がなくなることでしょう。30:07.32

次に73 ページ、その下を読みます。【求められていることは・・・神とともに歩むこと】

何度も言いますように、私は「今まで、教会で伝統的に教えられてきたことが間違っていた」と言いたいものではありません。いつの時代でも教会が持っている教理や神学は、その時代の回復のレベルに応じて、その時代の人々に語られるものなのです。

ですから、回復の度合いと時代 が変われば、教理や神学(の語り方)は、変わって当然なのです。その時代の必要が変わってくることによって、同じみことばから与えられる啓示に進展があるのです。世は移り行きます。そして、世に語られる道具としての教理・神学・説教も変化します。しかし、いつの時代の必要も満たし、歴史を前進させる神のことばは変わることはありません。ですから、私たちがしらけたり戸惑ったりしているとするな

5C⑬キングダムセミナー20260110

らば、それは神の回復は進んでいるのに、いつまでも以前の段階の振る舞いを要求されたり、語らされたりすることによります。

また、自分の霊は、新しい段階の啓示を敏感に受け取っていながら、自分の頭での考えやしゃべること、そして行動がいつまでも前段階のままであるならば、戸惑いを感じたり、ひどいものがきの中に入ることになります。
求められていることは、『キリストのからだ』を完成させる神の歩みに歩調を合わせることです。柔軟になって、神とともに歩むことなのです。神は生ける御言葉の啓示を常に聖書を通して、解き放っておられるのです。

「教会」という言葉には、過去のレベルでのイメージが積み重なり過ぎていて、これからの時代に前進するためには、しばらく使うべきでない言葉のようにさえ思えるのです。(でも使わないとやっていけないからね。)そして、『神の国』という言葉にもすでにいろんな概念がつきまとっていて、すんなりと誰の心にも通じる言葉はもうないようです。今回のような面倒な思い巡らしをしなければならないのは、そのためなのです。32:49.88

はい、**74 ページの下段**のここから、段々と重要なところ、ここを押さえといってください。

【**厳密な意味は、《神の支配(統治)する領域》**】なんです。

さあ、それではいよいよ『神の国』に関する内容について話を進めましょう。聖書のいう神の国の厳密な意味は、『神の支配・統治する領域・形』ということです。イエスのこの概念を旧約から受け継いでいます。ではここで、旧約における『神の国』がどういうものを指しているのかを見てみましょう。33:39.58

・・・と言って、右側に旧約の神の国・王国ということをイメージしている聖句をずっと挙げてきています。これを読むと、「あっ、やっぱり、イスラエルの王国なんだ」、「ダビデの王国、ソロモンの王国、あの地域、あのヨルダン川から地中海。そしてもっと広範囲な地域を指す場合もある。そこが神の国なんだ。」そういう目に見えて、手で触れられるもの。私たちが、敏感に肌感覚で持っている、それが『神の国』なんだというイメージが描かれています。そういう神が、支配する領域、統治だったわけです。

次に、**76 ページの下**を見て下さい。35:06.39

さあ、これらの旧約のみことばから、あなたはどのような御国のイメージを持ったでしょうか。虚心坦懐に読めば、すくなくともシオニズム運動の息吹きは感じられると思うのです。このように、旧約での神の国は徹底して、「この世の国」「地上での神の支配領域」だったわけです。それも遠い将来に実現するユートピアではなく、いまだ罪による問題やごたごたが、神の支配とともに混在する人間世界を「御国」と呼んでいるのです。そして、やがて、神の統治が完成する完璧な『御国』へと連続しているのです。

イスラエルは神の支配を全世界に及ぼすパイプ役として選ばれていたにもかかわらず、当時の彼らはこの神の支配と主権、そして自分たちの選びを自己目的化(自分達は選ばれた民、選民である。特別な民であると)してしまっただけでした。イエスキリストの到来は、この旧約に示された『神の国』を完成するための手段だったのです。イエスは、当時のイスラエルが歪曲して見えなくなっていた『神の国』の本質を取り出し、語り直しました。

5C⑬キングダムセミナー20260110

「神国という御父の支配は、キリストの贖いと聖霊の働きによって、この私たちの生活の場に完成するものだ」と。37:40.01

【王権が行使されているという《関係》が『神の国』なのです】というところに話が進みます。

このように旧約聖書を読むとわかるように、『神の国』というものが、神が選ばれた“イスラエルの王国”のように受け止められてきて、私達の現実の、この世の王国、地上での神の『支配領域』と言うものにしてきた観があります。これがイスラエルの神の国の特徴だったわけです。

これまでキングダムセミナーは、もう5回やって来ているんですけど、毎回同じ話をしているのではなくて段々と深くなっています。この第5クール目は、今まで言っていなかったこともたくさん話してきました。とくに創世紀の初めを少し時間をかけてやりましたが、なんで創世記を、わざわざ初めに詳しく話したかと言うと、この『神の国の概念』を、本来の神の国の概念を、神様が造ろうとした神の国の概念を、私たちが知るためだったという理由です。

だから、根本的には、旧約なんだ。イスラエルのあの時代なんだいことは言えるけれど、いや、もっと深く、もっともっと深く、原初から見ていこうとしたのが、この今のキングダムセミナーです。その方が結局、御国がストーンとわかるから、ということです。だから、「創世紀の初めって、何だったんだろうか」と、思う人はもう一度録音をしっかり聞いてください。40:52.33

77 ページの

【王権が行使されているという《関係》が神の国なのです】というところをちょっと読んでいきますね。

このように旧約(今日、ここで言っているのは創世記)からの御国の姿を思い巡らせていくと、私達が従来抱いていた“イエスを信じるなら、死んでも天国に入れる”と言うあの福音の構図に合致しないのがわかります。

「神の国」＝「死後の天国」という受け取り方は、非常に根強いようです。「神の国」は、「死んだ後の天国」を含みますが、それが主眼点ではありません。42:02.53

・・・我々は、“イエスを信じるなら死んでも天国に入れる”と言ったりします。よくそれを『救われる』と言ったりします。天国の『命』を持っているか、持っていないかという概念で。でも、『神の国という視点』、重要な『神の視点』で言うならば、その言い方って、ほんの部分的な言い方になってしまいます。・・・42:52.54

また、旧約の「御国」についての御言葉を思い巡らせていると、“イエス・キリストが再臨すれば神の国はやってくる”という構図とも噛み合いません。「神の国」＝「キリストの再臨後の世界」という概念も、私たちを「神の国」の啓示へと進ませない足かせとなっています。43:19.55

それでは、「神の支配(統治)する領域」とはいったい何なのでしょう。「神の支配(統治)する領域」すなわち「神の国」は、古くから『神の王国(キングダム)』と訳され理解されてきました。だから、「イスラエルが神の王国だ」とか、「ユダヤ民族国家が神の王国だ」とか言われ、ひいては「ローマ・カトリック」の国々、「大英帝国」、いや、「ドイツ民族」にまで、「神の王国」は世俗化されていきました。(こういう歴史がありました。こういった

5C⑬キングダムセミナー20260110

あまりにも、資質が伴わない「神の王国」に幻滅を味わった人々や教会は、彼方の「キリストの再臨後の世界」に「神の王国」があると限定せざるを得なかったのです。しかしながら、こういった理解はどちらも「王国の場所的な理解」だと言うことです。どこまで行っても、神が治めておられる場所を、この地球上か、あるいは、この宇宙のどこかに探し求めているのです。44:51.11

けれども、イエスは旧約にあった『神の国』の真の姿を掘り起こしました。イエスは「神の国」を「王国」(キングダム)として語らず、むしろ『王権』(キングシップ)として弟子たちに教えられました。・・・皆さん、イエス様の語られることの中で、これは大きなことなんです。・・・それは神が治めている"場所"を示さず、神が治めている形態、状態を示しているのです。 45:40.58

「神の国」の原語は、(ギリシャ語で)《 βασιλεία τοῦ Θεοῦ 》(バシレイア・トゥー・セウー)で、その「国」にあたる(ギリシャ語)《 βασιλεία 》(バシレイア)は、『王国』とか、『国』とかという場所的な概念というよりも、『王権』とも訳せる言葉です。だから同じ《 βασιλεία 》(バシレイア)であっても、ルカ 22 章 29 節の主の御言葉は、次のように訳されているのです。

[わたしの父が、わたしに王権を与えてくださったように、わたしもあなたがたに王権を与えます]

・・・ここは、ルカ 22 章 29 節なんですけど、手元に聖書のある方は、どうぞ、ここを開いてみて下さい。
29 節[わたしの父が、わたしに王権を与えてくださったように、わたしもあなたがたに王権を与えます]30 節[それであなたがたは、わたしの国でわたしの食卓に着いて食事をし、王座について、イスラエルの 12 の部族をさばくのです。]・・・これ、イスラエルの人々の中で、語っていることばですからね。「ああ、イスラエルの 12 部族を裁くんだ、そしたらば、やっぱり、再臨後の、あとあとのことじゃないか」と思ってしまう節がありますけれど、でもね、このことについては、同じような箇所がありますから、その都度、ちょっとずつ重ねていきたいと思いますけど、現在はこうだ、そして間もなく未来はこうだと言われる、古代、旧約の時代からの、所謂『啓示文書』の得意な語り方なんです。 48:33.10

そして、なによりも新約聖書は、ギリシャ語で書かれています。そして、そのギリシャ語で、[王権を与えてくださったように]というこの時制は、ギリシャ語でいう過去のあの日、あの時が決定的にあって、それが永遠に続くという、所謂『アオリスト時制』と言うんですけど、それを使って、[わたしもあなたがたに王権を与えます。]と言っています。ここは、現在形で書かれているんですよ。まあ、そういうことを知っておいて下さい。49:27.61

そして、ちょっと戻って、ルカ 22 章から前に戻って下さい。

17 章の 20 節[さて、神の国はいつ来るのか、とバリサイ人たちに尋ねられたとき、イエスは答えて言われた。『神の国は、人の目で認められるようにして来るものではありません。]21 節[「そら、ここにある」とか、「あそこにある」とか言えるようなものではありません。]・・・そうです。所謂、場所的理解や概念ではありません。・・・[いいですか。神の国はあなたがたのただ中にあるのです。]・・・この『ただ中』という原典の言葉が、非常にと

5C⑬キングダムセミナー20260110

うか、概念がちょっと広い。すなわち、あなたという一人の人間の心の中、『霊の中』に、あるんだという言い方と、あなたがた複数がいて、その複数いるあなたがたの、互いの間のこととも言える。

・・・AさんBさん、Cさんがいます。その一人一人の中にもいるし、その一人、一人の間、つまり関係の中にあるんだよということです。

その両方を組み取れる言葉なんです。つまり、『あなた個人のインサイドにある神の国』と、『あなたがたの間『ア
マング(among)』(～の中で、～の間に～に囲まれて という意)にある神の国』ですよということです。52:15.61

これが、現在私たちが受け取っている『神の国』なんです。・・・そうしていくと、私達の地位、王権を下さる
というのは、我々と主とイエスとの相互内在を思うと当然でしょ。イエス様と父とは相互内在。だからイエス様
は父と共にその権威を使いました。私たちも[我々と似るように]と神様が言って、そして[治めさせよう]と言って
造られたのが、私たちなんですから。その私たちが、サタンに神様との関係をねじられて、『私とそれ』の関係に
なってしまっていく。それで、我々の人の内にもともとあった王権は失われていったんです。それをイエス様は
来て回復してくれたんです。ですから、ここでイエス様が、『父がわたしに王権を与えてくださったように、わた
しもあなたがたに王権を与える』と言われたんです。55:31.00

78 ページのその真ん中の太い文字、『王権を与えます』というその下を読みます。

イエスと相互内在の関係にあるなら、イエスの持っていた王権が私たちに与えられていることは明白です。そして、私
たちは、そのイエスの権威を使うのです。すなわち、信仰を使うのです。私たちが神の権威を行使して
いるなら、私たちがいる所はどこでも「神の国」なのです。だから"どこ""そこ"という場所ではなく、信じる者に与
えられた神の権意を行使して、「私はこの場を清めます」「この霊を縛ります」「あなたを赦します」「祝福します」
「愛します」「信じます」「解き放ちます」など、あなたの意思で信仰を解き、語りあったり、預言し合う関係性、
その領域こそが、『神の国』なのです。

そしてもっと正確に言うなら、あなたと隣人、あるいは、あなたと自然界との間で王権が行使されているとい
う《関係》が『神の国』なのです。57:33.79

それだから聖書では、互いに愛し合うことや祝福し合うこと、赦し合うこと、愛をもって真実を語り合うこと
などが執拗に教えられているわけです。御言葉は二人 三人が心を合わせた場合や、信者が一つとなることによ
って、どんな偉大な力が現れるかを教えています。(マタイ 18:19、20。ヨハネ 17:21)58:08.95

ここで、79 ページで、2 つ目の段落のところを読みますよ。

どうかこれからの事柄を明確に整理しておきましょう。この『権威』というのは、そもそも全くの『関係概念』
です。例えば、この宇宙に何もなくあなたしか存在しないならば、あなたが権威を持っているとしても何の意
味もありません。権威とは、霊的存在も含めて、誰か、あなたと共に『存在しているとき』に初めて、生まれる

5C⑬キングダムセミナー20260110

言葉なのです。私たちは主に対して、サタン・悪霊に対して、人々に対して、そして自然界に対して、イエスの権威を行使するわけです。それぞれ持っている権威の使い方はもちろん異なりますが、私たちの日常生活のすべての場面に『権威を行使する』ことが関わっているのです。

『権威を行使する』とは、ただ何かに威張ったり、命令したりすることを思い浮かべてしまうのでしょうか。
 ……そんなことはありません。この話をしていたときに昔、ある方が、「傲慢になっていくんじゃないですか？」と、言われたことがあります。そんな、そういうことではありません。これが傲慢に思えるのだとしたら、『相互内在』『主との一致』がまだ充分消化されてないんです。この権威はものすごく、主との十字架と霊の復活からくる『謙遜』を我々に導くのです。何かサタンに命令したり、悪霊を追い出したりすること、それは確かに文字通り、命令であり、権威を使います。……

それは、権威を使うことの一部でしかありません。だから、慌てて荒々しい闘争的な気分を鼓舞する必要はありません。信者の『権威の行使』については、20世紀の「悪霊追い出しの回復」が確かに口火を切ってくれました。しかし、一方で『権威を行使する』というこの御国の豊かな概念をあまりにも狭いイメージにしてみました。サタンを縛り、悪霊を追い出すという御国の回復の一場面が、あたかも全場面であるかのように受け取られるときに、サタンは御国の啓示に蓋をすることに成功したのです。1:01:43.08 ここ、良いですか？

これは預言にしても、癒しについても同じです。「彼は預言をしました。彼は悪霊を追い出しました。でも、彼は御国に歩まず、入りませんでした」と言うことが、現実には起こりうるのです。1:02:08.56

とにかく『権威』という概念は、御国の啓示において確かに鍵となるもので、これからのわたしたちの学びと黙想を、このみことばが導いてくれるでしょう。そして権威を行使するという豊富な内容については、後日また詳しい話をしますので、ともに啓示に進んでいきましょう。

……と言うことから、これまでの『救い』という概念、そして『神の国』という概念、そして『終末』という概念とか、『教会』という概念とか、紆余曲折、この歴史の中で出てきて、今現在の我々もいろんなルートをたどってきています。

だから、その概念が、もうごちゃごちゃなんです。それをちょっとなんて、余計なものをふるい落としながら、この聖書の原文の中に沿っていこうという作業がここにあるわけです。1:03:37.48

マタイによる福音書の13章にたとえがいっぱいあります。これをサーッと、駆け足になるかもしれませんが、この前半の最後に目を通しておきたいと思います。1:04:13.19

13章に "たとえ"がいっぱいあって、最初に「種まきのたとえ」が、あります。この「種まきのたとえ」は、

5C⑬キングダムセミナー20260110

もう読みませんけど、19 節、このたとえの解説自体を、イエス様がしておられるわけですけど、・・・19 節に今行く前に 11 節を見てください。これは、弟子たちがなぜたとえで話されるのですかと、言った質問に対して、11 節【イエスは答えて言われた。「あなたがたには、天の御国の奥義を知ることが許されているが、彼らには許されていません。」・・・あなた方は天の御国の奥義を知ることが許されているが、彼らは許されてないからだと言われたこの『天』の御国という言い方、これは『神』の御国のことです。「天だから天国のことじゃないんですか？死んだ後に行く・・・」と言わないでくださいね。1:05:46.58

マタイによる福音書は、ユダヤ人の信者に対しておもに書かれましたから。ユダヤ人の信者達は、「神、神」とあんまり言いませんでした。その名を言うことを畏れ多いし、みだりに使うなということだから、神様のことを天と言いました。だから、このマタイの福音書では、たとえ話の中に時々、「天の国」という言い方をされるわけです。1:06・24.91

それから、13 章の 19 節【御国の話を聞いても悟らないと、悪い者が来て、その人の心に蒔かれたものを奪っていきます。道端に蒔かれるとは、このような人のことです】

・・・『種』とは、御国の言葉。その御国の言葉の種を我々は、内側に蒔かれた。それを実らせるのは、私達の側の状態による。これはもう紛れもなく、『神の国』のたとえなんです。『神の国』というのは、種蒔く人の種だよと。1:07:29.37

その次 24 節。【イエスはまた別のたとえを彼らに示して言われた。『天の御国は、こういう人にたとえることができます』（このたとえはね、みんな神の国のたとえなんです。）ある人が自分の畑に良い種を蒔いた】

25 節【ところが、人々の眠ってる間に、彼の敵がきて麦の中に毒麦を蒔いて行った。】

26 節【麦が芽ばえ、やがて実ったとき、毒麦も現れた。】

27 節【それで、その家の主人のしもべたちが来て言った。】『ご主人。畑には良い麦を蒔かれたのではありませんか。どうして毒麦が出たのでしょうか。』

28 節【主人は言った。「敵のやったことです」すると、しもべたちは言った。「では、私達が行ってそれを抜き集めましょうか。」】1:08:22.24

29 節【だが、主人は言った。『いやいや。毒麦を抜き集めるうちに、麦もいっしょに抜き取るかもしれない。】

30 節【だから、収穫まで、両方とも育つままにしておきなさい。】

・・・一番最後の収穫の時に、それを分けなさい。選びなさい。と言っているから、やっぱり、この時代が終わった最後の週末の時が、天の御国じゃないですかと、ここでも思いたくなる。1:09:09.78

でも、そうじゃない。

天の御国は、その終わりの時の『収穫の時』であるとは言っていない。天の御国は、こういう『人』にたとえられることができると、言っています。これは、天の御国の中の描像で、完成された死後の世界、天の御国の中に、毒麦があるんだと、そう、思ってしまいがちですけど、違うんですよ。1:09:42.98

5C⑬キングダムセミナー20260110

天の御国は、今生きている私達のものなんですから。

31 節、【イエスは、また、別のたとえを彼らに示して言われた。「天の御国は、からし種のようなものです。それを取って、畑に蒔くと、32 節【どんな種よりも小さいのですが、生長すると、どの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て、その枝に巣を作るほどの木になります。】

・・・天の御国は、大きくなって、葉が茂って、花が咲いて、空の鳥が来て、巣をたわわにいっぱい作って賑やかになっていきました。その最後が天の御国ですと言っていないです。

天の御国は、からし種のようなものだと言ってるわけ。だから、からし種というのは本当にちっちゃなものでしょ。それを蒔くと、種が割れ芽が出て、小さな芽が枝になり、葉っぱが出て、そしてだんだんと大きくなっていくんです。その小さいものから成長していくそのプロセスを全部含めて、天の御国を描いているわけです。

1:11:23.60

天の御国には、赤ちゃんがいますよ。まだ生まれたばかりの赤ん坊がいますよ。でも起き上がって、歩き出す子もいます。そして陽気に無邪気に親とともにいることが嬉しくて、もうたまらなくなつて、喜んでしゃぎまわっているでしょう。思春期になって悩み出す子がいるでしょう。青年期になって、よーし、じゃあ俺はこうなるぞと言って、腕捲りをする青年もいるでしょう。でも黙って働いて、子供や若者を養い育てている大人がいるんです。それが全部神の国 なんです。

1:12:14.07

33 節【イエスは、また別のたとえを話された。「天の御国は、パン種のようなものです。女が、パン種を取って、三サトンの粉の中に入れてと、全体が膨らんで来ます。」

・・・ほら、これも同じでしょ。天の御国は、パン種のようなもので、そこに入ったら小さくて何もわからないものではありませんよ。誰もがそれを認識し、見えてくるものですよと。膨らんでくるんですよ。

で、その次、36 節、【それからイエスは群衆と別れて家に入られた。すると、弟子たちがみもとに来て、「畑の毒麦のたとえを説明してください」と言った。】・・・で、ここでまた、イエス様が説明します。

37 節【イエスは答えてこう言われた。「良い種を蒔く者は、人の子です。】

38 節【畑はこの世界のことで、良い種とは御国の子どもたち、毒麦とは悪い者の子どもたちのことです。

・・・御国の子どもたちと悪い者の子どもたちが一緒にいるわけです。

39 節【麦を撒いた敵は悪魔であり、収穫とはこの世の終わりのことです。

そして、刈り手とは御使たちのことです。】

40 節【ですから、毒麦が集められて火で焼かれるように、この世の終わりにもそのようになります。】

41 節【人の子はその御使いたちを遣わします。彼らは、つまずきを与える者や不法を行う者たちをみな、御国から取り集めて、・・・御国から取り集めるんです。だから、御国だったんです。1:14:27.13

(42 節【火の燃える炉に投げ込まれます。彼らはそこで泣いて歯ぎしりするのです。])

5C⑬キングダムセミナー20260110

43 節[そのとき、正しい者たちは、彼の父の御国で太陽のように輝きます。・・・]1:14:35.21

44 節[天の御国は、畑に隠された宝のようなものです。人はその宝を見つけると、(・・・要するに、天の御国を畑で見つけるとということよ・・・)それを隠しておいて、大喜びで帰り、持ち物を全部売り払ってその畑を買います。]・・・って、それだけ価値がある。やったー！見つけた！と。ね、天の御国は、畑に隠されているんだと。見つけようと思わないものには、見つけられないんですと。

で、45 節。[また、天の御国は、良い真珠を探している商人のような者です。]

46 節[素晴らしい値打ちの真珠を一つ見つけた者は、行って持ち物を全部売り払ってそれを買ってしまいます]

47 節[また、天の御国は、海におろしてあらゆる種類の魚を集める地引き網のようなものです。48 節[網がいっぱいになると岸に引き上げ、すわり込んで、良いものは器に入れ、悪いものは捨てるのです。]49 節[この世の終わりににもそのようになります。御使いたちが来て、正しい者の中から悪い者をえり分け、]50 節[火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて齒軋りするのです。]1:16:09.16

地引網の中にいっぱい入っていると。天の御国は、この地引き網のようなものだ。天の御国の中で、その選別が始まっていきます。1:16:36.92

52 節[・・・「だから、天の御国の弟子となった学者はみな、自分の蔵から新しい物でも古い物でも取り出す一家の主人のようなものです。]

・・・天の御国の古い時代のももの、天の御国の最新のものも、あなたは取り出すことができます。味わうことができますよと、言っています。だから、天の御国は、この時代がずんずん進んで、こっからここまでの時代が天の御国ですよとか、そんなことは言ってない。最後の最後の究極の局地であるキリストがもう一度来られる。あるいは、我々が死んで天国に行く、黄泉に行く、そっからが、天の国でありますと、いうんじゃないんです。1:17:47.34

我々は今も、神の『王権』に預かり、『相互内在』に預かり、生きているわけです。その我々の『関係性』というのは、どんな関係性ですか？我々は、隣の人とどういうふうに、過ごしていけるんですか？どのように隣の人を見るんですか？私達が、イエス様の啓示を得たように、私達は隣同士、互いが互いの人の中に神の姿を見えますか？そして、祝福していますか？それを我々が、引き出しています。

『王権』というと悪霊の病の癒し、預言というふうなイメージというものに惹かれて、引き寄せられていくけど、そうじゃないんですよ。それは、ほんとに、現れの一部で、キリストの王権とともに神の国を生きるということの日常性の深さ広さを、我々は知っていないといけないんです。知ることができるんです。

はい。後の続きは、後半にします。後半 は、もうちょっと、これを突っ込んで詳しく話していきますので、15 分間、休憩しましょう。

後半

はい、後半を始めます。

今日の話の内容に即した私のメモノートをプリントにしてみようと、昨晚思いたちまして、それでプリントにしたものを、会場の対面の皆さんには配りましたが、ライン参加の皆さんには今 LINE にアップしましたので、見にくいでしょうけれども、どうか見てください。でも、ちょっと字がややこしくてという人は、耳で聞いて頂ければ良いと思います。もともと口で話そうとしたことなのでね。

マルコによる福音書の1章の15節。有名な聖句で、誰でもクリスチャンになった初めや宣教の初めに聞いたり、目にしたりします。

14節から読みます。[ヨハネが捕えられて後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を述べて言われた。] 15節 [時は満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい]・・・あまりにも有名なイエス様の一言。宣教の初めの一言ですよ。バプテスマのヨハネも宣教の初めに同じことを言っています。それで、私たちが馴染んできたこの[時は満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい]と、言われてきていることを皆さん、「これはどういうニュアンスなんだろうかと。それをキングダムセミナーの『神の国』というあなたのイメージで、あるいは、これまで持ってきたイメージで、ちょっと考えて、聖書を読んできてないでしょうか。つまり、[神の国は近づいた]と言っているイエス様の第一声はどういうニュアンスで言ったんだろうかということです。

ここで、[時は満ち、神の国は近づいた]と言っているこの元々の原文（ギリシャ語）そのものに目を留めて、一つ一つを丹念に調べていくと、物凄く納得するものが、あるんですよ。

だから、もう難しいから、ヘブライ語だのギリシャ語だの、もう言わないで下さいと思う気持ちはわかりますけれど、でも、もともとこう書かれたものそのままですから、ね。私たちがそれを味わうことに決して損はないです。 4:25.46

それで、今配ったプリントを見て下さい。マルコによる福音書の1章の15節のギリシャ語ですが、三段に分けて書いてあります。[ペレロータイ ホ カイロス]、一番初めの[時は、満ちた]という言葉です。この[満ちた]という言葉は、[いっぱいになった]と訳しているんだけど、他の文脈で、他の言葉でいろいろ使われていて、そこから、この言葉そのものの意味をもっと豊かに受け取れるから紹介していきます。

[満ちた]という、[ペレロータイ]は、『成就した・実現した・完成した』という意味がある言葉で書かれています。私たちが何か手伝いましたか？何も手伝ってないですよ。でも、『満ちた』・・・ということは、私たちは手伝ってないようだけど、創世紀の初めから、満ちる、満ちさせるためにこれって、神とパートナー的に歩んだ人たちがいっぱいいたんですよ。だから今日私たちがこれを見た時は、これを成就するため、実現するため、完了したと。だからもっと、もっと、実現するために私たちは参加することができるんです。

5C⑬キングダムセミナー20260110

で、その次、【ホ カイロス】、『時が』と書いてある。この『時』が【カイロス】なんですよ。聖書のギリシャ語の中には、『時』と現す言葉が2種類ありまして、ここに書いてある【カイロス】ともう一つは、【クロノス】と言います。ここに書いてある通り【カイロス】は、神が介入してことを成す特別な時間、アイミング(狙いを定める意がある)をカイロスと言うのです。

ところが、もう一つの【クロノス】は、自然の、カレンダーや時計で測れる日常の時間、我々が時計を見てあと3時5分になったら、あと何時間経ったらと言う、日常の時間というものを言います。これも聖書の中で、いっぱい使われているんです。07:53.61

でもここで、イエス様が使った言葉は【カイロス】でした。この『時』は神が介入して、神が『特別な今、タイミングだ。この時だ。平凡なダラダラしたカレンダーの時じゃないよ。この日、この時だ』と。つまり、その神が『ことを成す』という、『その時がやってきた』と言っているわけです。『その時が成就した』と言っているわけです。8:39.28

だから、今日は、2026年、1月10日。これは、クロノスです。でも、今日という日が来るまでに、あなたの人生の中で、カイロスの時もあったでしょう。どうですか？私の今までの何十年間の人生の中で、あの時期は、カイロスであった。確かにそういうふうに振り返りませんか？9:33.81

でも、このカイロス（時）が、神様が人間の準備がどうであれ、あなたの気持ちの準備がどうであれ、神様がやってきてこの時をもたらし、私たちに押し付けてきますか？いえいえ、カイロスは、神が介入して動き始めるんだけど、私たちがそれと向き合って受け止めていかなければ満ちていきません。神が勝手にあなたを押し退けて、お前ちょっとどっかにどいておれ。すみにおれ。って。俺がやるからと言うんではないんです。10:27.32

『我と汝』と言うでしょ。神様は一方的にあなたを支配し、あなたを将棋の駒のように将棋盤の上において指1本でポンポン、ポンポンあなたを動かし、支配しているのではありません。あなたと向き合い、あなたの思い、あなたの『応答』を見ながら、その時を進めておられるわけです。11:06.79

イエス様が到来されたというずっと前からそうなんです。そのために。神は準備のために選びの民を起こされてきたわけ。だから、イエス様が生まれる時も乙女マリアに神様は「カイロス」を持ってきたわけでしょう。それで、マリアは【おことばどおり、この身になりますように】(ルカ 1:38)と言って、カイロスは実現していくわけでしょう。婚約者のヨセフは、ものすごく動転したと思いますよ。「いや、なんてことだ」と。でも夢で【恐れないあなたの妻マリアを迎えなさい】(マタイ 1:20)と言われて、彼は受け入れたわけですよ。そこにカイロスがあるわけ。

5C⑬キングダムセミナー20260110

イエス様も幼い頃から、大工の手伝いをされたり、いろんなことをして、この年になって、バプテスマのヨハネと出会って、ご自分の使命を受け取っていかれたわけでしょう。だから皆さん、2026年というこの時をあなたは、ただ単に、ぼーっとして、平凡に『クロノス』として生きるのか。「ああ、25年ああったから、どうかな？」という感じで。

または、向き合っている主が、私に何を誘っているのかな？ということ pensando、応答しようと、生きるのか。それは、小さなことかもしれませんが。そんな大きなことではなくて、私達が、去年の、25年までの私達のレベル、私達の自分の内面、あるいは、信仰の使い方、そういったものがあつたけれど、2026年は、一歩踏み出て、一皮一皮を剥いて、「ヨシ、ここを進んでみよう」と、神の誘いに応答していけば、私たちは目の前にある今日、明日と言うその時間が、カイロスになっていくんです。 それが、『時に対する王権の使い方』というものなんです。 14:37.59

そして、プリントの真ん中の段。

[そして、近づいた]・・・何が近づいたんですか？『神の国』がです。大テーマをイエス様は働きの初めに言っています。この[そして]は、アンドですけど、[ヘンギケン]は、[近づいた]という言葉。ここに書いていますけれど、[近づく]は、啓示文書(聖書)では、「もうすぐ来るけど、まだ来てないよ。」というのじゃあない。そういう、やたら細かく科学的な、自然科学的な頭で言っているんじゃないんです。「既に来ている」「あなたの前に来ている」「もう来ている」んです。それを、啓示文書あるいは黙文書といって、この聖書の語りというものの中では、どこまで来ているかっていうのを細かく、微に入り細に入り、目と手で描かれるように、表現はしません。「じゃあ、『来ています』と言えばいいじゃない。じゃあ、なんで『近づく』という言い方するのよ」と。・・・ここね、スタティックな静的な語りをしないんですよ。動いて、向こうからあなたのところにガーと迫ってやってきているという運動体のような動的な表現をするんですよ。 17:25.68

これを現代人が、ほんとに冷めた目で読んだら、「ああ、神の国、近づいてるんだ。」「あ、でもまだ来てないんだ。」と、そういうふうに分の中ですトンと思いたがる。勝手に納得するんです。でもそうじゃあない。「来たんだよ。凄い勢いで。」「あなたを目指してやってきたんだ！近づいてやってきた。」「あなたの前にきたんだ。」という感じ。やってきたのだからという、「今あなたの応答を待っているんだ」と言う切迫した表現がいっぱいあるんです。 18:16.51

だから、今までこう読んできたけど、・・・という感じは、もちろんあったとしても、聖書の沸騰する文脈と土台の中から、これを言っています。

[時が満ちた] [カイロスが満ちた。]・・・それは、あなたの応答、人々の応答によって、今、完了したんだ。だけど、もっと、来ているものがあるぞ。すでに来ているよ。ここに来ているよ。あなたの応答を待っているよ。あなたの戸を叩いてるよと。あなたの心の戸を叩いているんだよと。という迫りが、そこにあるんです。

19:25.64

5C⑬キングダムセミナー20260110

そして、その後、【バッシレイア トゥーセウー】【神の国が】と書いてある。この【バッシレイア】は王国とか国とかも訳されるけれども、根本的にはもう言いましたように、領土的な場所、国土ではなく、『神の王権』『統治』を指しています。神と人と、人と人との王権による関係性のことをいいます。20:23.04

このことが、はっきりする。だけど、聖書の中には、この世の終わり、この世の遙か先、その時に神の国がある。"受け継ぐ"という言い方もしているわけよ。だからね、今現在の神の国の姿というのは描かれているけど、究極的に完成していくところまでいった『極地』、というものも描かれているわけです。それが、啓示文学の描き方なんです。その『極地』というのは、こういう様子だよ、こういう情景だよと描かれています。21:20.83

私達は、その極地があること、そう描かれた『絵』を心に描きながら、今という、今日という神の国の王権の生活に生きるわけです。

すでにある神の国と、未だ完成していない神の国の間に、我々は生きているんです。これが新約聖書。旧約もそうだけど、そういう、描き方なんです。22:18.31

そして、場所や国土ではなく、神の『王権』『統治』を指しているということは、さっき、旧約のあり方は、イスラエルの国家、イスラエルのあの王国、"ダビデやソロモンの王国に象徴されているという現実の世界だ"という取り方が、旧約の世界の中では、盛り上がってきていました。

だから弟子たちがイエス様に聞くんですよ。「あなたが国を起こしてくださるのはいつですか？」と。それはあのダビデの王国、ソロモンの王国の時代をもう一度、なんです。・・・ここで話し出したらいっぱいあって、今回も次も、次も次もと話し出すことになるから、話になるときはまた話しますが、・・・一つ、例に取らしてください。23:44.94

創世記の32章にヤコブが、ヤボクの渡しで、神と格闘するというところがあったよね。読んだことがない人はいないと勝手に思って話しますよ。

32章後半、24節から、【ヤコブはひとりだけあとに残った。すると、ある人が夜明けまで彼と格闘した】25節【ところが、その人は、ヤコブに勝てないのを見てとって、ヤコブのものつがいを打ったので、その人と格闘しているうちに、ヤコブのものつがいがはずれた】26節【するとその人は言った。『わたしを去らせよ。夜が明けるから。』しかし、ヤコブは答えた。「私はあなたを去らせません。私を祝福してくださなければ。」27節『あなたの名は何というのか。』彼は答えた。「ヤコブです。」28節その人は言った。『あなたの名は、もうヤコブとは呼ばない。イスラエルだ。あなたは神と戦い人と戦って勝ったからだ。29節ヤコブが、「どうかあなたの名を教えてください」と尋ねると、その人は、「いったい、なぜ、あなたはわたしの名を尋ねるのか」と言って、その場で彼を祝福した。30節そこでヤコブは、そのころの名をペヌエルと呼んだ。

・・・有名な『ヤボクの渡し』のこの話を、みなさん、知ってきたと思います。

5C⑬キングダムセミナー20260110

ここで、ヤコブが、『イスラエル』という名前にされているんですけど、この原文が言いたいところは、28節の『あなたは神と戦い、人と戦って勝ったからだ。』というところ。これね、こういうふうに神と戦ったとか、相撲を取ったとか、人と戦って勝ったと、単純に勝ち負けのことにように、表現しているでしょ。でも、このあなたは、『戦う』というこの言葉なんですけど、これね、あなたは神と『ぶつかり合い』『神とせめぎ合い』とか、そういう表現なんですよ。

そして『人とぶつかり、せめぎ合い、そして最後に勝ったからです』と言うところは、別に訳せば、それを『成し遂げたからだ』『やり切ったからだ』という言い方になるんです。

27:58.40

あなたは神と胸を当てぶつかり、せめぎ合い、人とぶつかりせめぎ合い、・・・そうですよ。ヤコブのこれまでの人生という生まれる時から兄エサフの踵をつかみ、ぶつかり、いざこざやってきたんでしょ。そして、おじさんのところに行ってから、もう散々なところで、いざこざを経験してきたんでしょ。28:33.80

で、最終的に、このヤコブの渡しにきた時、神ご自身と頭をぶつけ、腹をぶつけ、胸をぶつけ、せめぎあった。そして、祝福してくださいと。そこまで攻め寄った。離さなかったんです。

神とそのようにやった。人ともあなたはそのようにやった。これからは、お兄さんと対面しに行くわけでしょ。ドキドキじゃないですか。もう何十年経ったとしても、兄貴、まだ怒っていて殺されるかもわかんないよ。だから自分の贈り物やなんかを先にやって、お前が一番大事なんかいと言いたいくらい、これは、こそくなことをやっているわけ。でも彼は、神に胸を当て、腹をぶつけ、そしてからみついていたんですよ。人ともそうなんです。29:46.30

おそらく、これから兄貴に会った時に、彼は兄貴に柔軟な姿勢をとりますよね。それは「神に対しても、人に対しても、もうそうしよう」というふうに、腹が決まったんだと思う。このようにね、神と人との、ヤコブは、徹底的に『我と汝』を通したんです。

30:33.77

我々が『我と汝』という時、非常に愛情を待って、優しい心でね、「あなたよ」とか、「はい、私よ」って、そんなことを思い浮かべるでしょう。

けどね、本当に聖書がいう『我と汝』というのは、もっと厳しいんです。これって。神様とヤコブが、胸を合わせた時のように、『我と汝』をしますか？それと同じように私たちは、一緒に生きている人たちにしていますか？

31:24.21

このヤコブのしたことが、この『我と汝』『私とあなた』と言う関係性、厳しくもあり、そして全てを使い切ったこの向き合いをね、『イスラエル』というんです。

5C⑬キングダムセミナー20260110

ですから、「イスラエル」というのは、あの土地、あの国のことじゃないんです。本来は。後に、あの民族が支配し、領域として、領土としていく土地を、もともと指してイスラエルと、人は言っているのかもしれない。今も言っているのかもしれない。でも、神の『イスラエル』の命名は、『我と汝』なんです。徹底した厳しい、息絶え絶えの『我と汝』なのです。32:45.68

このリアリティーですよ。あなたがこのヤコブの血を引いているとか、子孫だとか、そんなこと関係ない。イエス様は言っているじゃないですか。『アブラハムの子孫だとあなたは言うのかと。』パウロも。そんなことは、関係ないと。「私はアブラハムの子孫です」という人がいたら、「そうですか。珍しいですね。でもそれが何なの？今の神の国で、それが何なのよ。」と、そういうことでしょう。違いますか？34:01.81

時間が無くなってきたので、もう少し進みます。さっきのプリントに戻って、3段目いきます。

そういう『王権を使う』ということは、主の前での『汝』として、我々が招かれてるんです。そして我々のところにね、今来ているんです。ダーッと来ているんです。怒涛のように押し迫ってきている。そして、あなたの『応答』を待っているんです。コンコンとノックして。それが、『神の国』なんだよと。

だから、それに対して三段目。【メタノイテ カイ ピステユーテ エン トー ユーアンゲリオー】悔い改めて そして 信じなさい。福音をこういう言葉で終わっているんです。

【悔い改める】ということは、あなたはどんなイメージできたでしょうか？なんか自分の胸を叩いて、「ああ、私ってなんてだめな罪深い情けない人間なんだろう。」と、多くは、懇々と自分に涙を流して悔い改めるということが想像されます。けどね、そう言って悔い改めといて、後で、ケロッとすることもできるんですよ。人間の心って、そうでしょ。

そうじゃなくて、「今すでに、戸口に私は来ているから、私に向き合いなさい。こっちを向きなさい。」ということなんです。「主の方を向きなさい」ということなんです。主に振り返る。今まで違う方を向いてたんです。チラッチラッと、気にしながら見てたかもしれない。けど、そんな辺りをキョロキョロするような向きじゃなくて、その怒涛の勢いで、「あなたの胸のそばまできたぞ」「叩いているよ」「こっち向いて」「お願いだから、こっちを向いて」と。

私たちが、『主に振り返る』というそれだけの心なんです。そしたら始まるんですよ。すべて、準備して持ってきてくれるのだからね。自分のことを定規で測って、あれこれ「私はこんなんです。ああなんです。恥ずかしいです。いやダメなんです」と言って振り返る。それは、振り返りじゃないんだよ。それは、振り返ることのような言い方をしていながら、自分の目線はよそを向いてるんだよ。37:42.18

5C⑬キングダムセミナー20260110

それね、面白いことにね、『悔い改める』を、ヘブライ語で『シュープ』とも言うんです。『帰る、立ち帰る』という意味があるのだけど、『しっかり立ち返る、振り向く』とは、別の意味をもって使われるのです。今までのところから、『離れ去る』とか、『退く』とか、一見パッと見ると、「何これ？逆じゃん」と。「これが、悔い改める？」と、突っ込みたくなる。

でもご心配なく。ここに書いてあるように、今までの方向から、今まで見ていたところから、『離れ去る』ということです。今までの自分が慣れてきたもの、見ているもの、向き合ってきたものから、『退く』ということです。「ええ？」だから、この[メタノイテ] 『悔い改めなさい』ということは、『向きを変えなさい』ということです。

「向きを変えています」と、言うんだけど、同時に、昔の自分も見ている。退いてないわけよ。離れ去ってないわけよ。この二心が、あなたを御国の中で、楽しませることがなくなってしまうんです。39:42.11

で、最後の[信じなさい][ピステユーテ エン トー ユーアングリオー]、これもどうですか？みなさん、『信じる』という概念を、どう思ってきましたか？信じるというのは、「イエス様を信じてます。」「イエス様が来られたことを信じてます。」と言うに優しいけれど、・・・『信じる』というのは、やってきた人に「ああ、そこに、この部屋の隅っこに電子ピアノがあることを信じてます。」と。科学的に、合理的にあるから信じられるよね。でも、この部屋を初めて借りようとしていてまだ見てない時、「その部屋にはピアノがあるかしらね」って。「そりゃあ、クリスチャンの集会だからあるでしょう。あると『信じます』」とやってきた人に言う、その「信じます」と言うのは、いかにも近現代的な『信じます』です。

聖書がいう「信じます」の根底は、やってきた人に『向き合って』、心の戸を閉めているんじゃないんです。自分の心の戸をオープンにして、相手の心と自分の心を交えて、『応答し合って生きる』と言うこと。これを『あなたを信じる』と言っているわけ。

「まあ、どんな人間かわかんないけどね、悪いやつじゃないと信じよう」と、そういうこともできちゃいますよね。信じるは。

で、その後の[エン トー ユーアングリオー]という、[ユーアングリオー]は、もうご存知の通り、『福音』という言葉なんですけど、この福音は、何の良い知らせなんですか？福音というのは『福の音』でしょう。だから、めっちゃ、めでたい音なんじゃないですか？鐘が鳴ってる？ラッパが鳴ってる？そういう音を福音？これは、『王権の回復』と『完全な勝利』という『現実の宣言』言葉なんです。

この[ユーアングリオン]というグッドニュースというのは、昔ギリシャ界限の世界で、「ねえ、ねえ、あそこで安く売ってるよ」というような個人的な良いニュースじゃないんです。

5C⑬キングダムセミナー20260110

王様がやってきて、王がこういうことを布告した。王が「税金を安くするぞ」と言ったとか、王が「この街を造り変えるぞ」と言ったとか、王が「この洪水がきて氾濫する川を王が、修めるぞ」といって、王が街全体に、国全体に、ビックニュースとして、アナウンスする、その良い知らせだったんです。だから誰もが聞いたこの「ユーアンゲリオン」をクリスチャン達は、伝えたんです。福音としたんです。44:23.13

我々の王権が、「したぞ。」そしてそれは、「勝利なんだよ。」「御国の勝利なんだよ。」ということを語る『ビックニュースを信じなさい』と福音の間に、何があるかと言うと、『信じなさい』という言葉の中には、『エン』、これが使われていくんです。【中で】と言う言葉。

この『王権の回復』と言う現実の中で、『中で』、あなたの心を開き合って、互いの心を開きあって、・・・神様は私たちに心を開いてくださっている。心を交えようとして下さっている。いつでも応答しようとなさっておられる。それは、今の現代、私達は、内なる内在する聖霊によって、湧き上がってきている。聖霊が我々の代わりに執り成し、祈って、祈って、そして言葉を出し、わたしたちに現して下さっている。でしょ。そういうふうに、心と心を交えて、応答しあって、生きるんです。

そして、神が、造られ、私達が共に造る、互いの中に、飛び込んでいくんです。互いが互いの中に、介入し、飛び込んで入るんです。文字通り、『相互内在』なんです。それを聖書は、『信仰』と読んでいるんです。46:21.26

ギリシャ人の神殿を信じる信仰ではないんですよ。偶像礼拝の信仰を讀え、犠牲を捧げるという、その『信仰』ではない。全然、違う。ハレルヤ、どうですか？これだけの思いを込めて、イエス様の第一声が、語られているということ、受け止めていけたら、どうですか？みなさん、ギリシャ語の聖書をこうやって、一字一字、深掘りしていくって、凄いいじゃありませんか？したくありませんか？

【神の国って何ですか】という、その中で、神と向き合い、私達は自分の心を神と交えていく、その中で、私達は兄弟姉妹と、家族との向き合い方が、変わってこないはずがありません。

神の向き合い方、そこに本当の『イスラエル』があるんです。48:32.77

この歩みの中でこそ、究極の極致としての神の国の『姿』が、描かれていくとすれば私たちは、『永遠の今』の建て上げのために、その極致の『絵』があるんです。

はい、次回は、・・・その週末の『絵』って、どうなのよという気持ちがモヤモヤっと、あると思いますので、ちょっと、そこを取り扱います。

けど、所謂、終末論はこうですよ、ああですよと言って、そこを微に入り細に入りというのでは、ありません。というところをご了解下さい。

5C⑬キングダムセミナー20260110

時間が来ていますけれど、何か今日の話の中で、コメントや是非、この点を聞いてみたいというのがあるでしょうか？少し時間が残っていますから。

54:35.66

3 番 賛美

主よ、

我々を祝福し、

我々のところに、突進して下さい、

我々を見いだして、

我々の心をいつも叩いてノックしておられる。このことを感謝します。

私たちは、同じように主よ。あなたの胸を叩き、あなたの胸にこすり、

あなたの心と私の心と、

私たちの心と交えたいです。

これがどんなに、大きなことか。

あなたの神の国を、神の王権の交わりを 今日はっきりと見て歓迎します。

祝福します。あなたの言葉を。

我々を互いに祝福し合います。

ハレルヤ！御国の王権の中であって、これらの言葉を告白します。

宣言します。感謝します。

アーメン

今日のキングダムセミナーを

終わります。